

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	12
瑪瑙集	25
紅玉集	27
4月号月評	28
総合誌の窓	30
阪本哲弘句集鑑賞	32
特別作品「五月の旅」	34
琥珀集作品鑑賞	36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	37
Ⅱ	38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	39
俳誌文款	41
他誌転載	42
忍海の里	43
妣の国父の蒼天(13)	44
高山茶笥の里・長弓寺吟行記	46

今月の一句

石筍に春の言葉の溜まるべし 桂 樟蹊子

昭和三十五年作

山口県秋吉台にての作品である。作者の言葉に「観光客の声で反響していた。それぞれの美しい石筍には、立つ人々の言葉も滲みて、永遠に太り続けるであろう」とある。年間には幾万の人達の訪れる鍾乳洞は圧巻であり、自然の造形に対する畏怖にも似た感動をうまく捉えられたものである。

隆子

落

椿

塩路隆子

烏骨鶏産卵あとの寒の水
雪の夜を期待の風や越泊
春の炉に請はるる大江鬼ばなし
少年の髪にひとひら春の雪
矢絰の木綿に摘みて露の臺
家ごとに鶏と屋やあるむかし桃花
天帝へ飽くなき思慕や落椿

四月号光耀抄

春雪に高張うるむ娶唄
老境のこれが王道大根引く
省略の新語汨濫冴返る
気紛れな村の時雨の幾そたび
朱鷺来しと噂広がる雪の街
観音力得たる気分や寒日和
ふるさとの野川にいまも猫柳
編み上げし吾がセーターの好み色
寒椿山の学校女児ひとり
己が街の影絵となりぬ冬夕焼
酢茎樽干されし賀茂の豊かなる
炭をつぐ父の気配や朝まだき
黒米の飯はむらさき土筆和
野焼見て戦国の世を思ひけり
出来上がりよき粉ふきて古老柿
ねずみ役の台詞うらや園児劇
蔵人の紺の前掛け春を待つ

田下 宮子
阪本 哲弘
森下 康子
能勢 栄子
坂根 宏子
竹内 悦子
中川 すみ子
増田 一代
松岡 和子
三川 美代子
宮崎 左智子
宮田 香
坂上 香菜
塩路 五郎
杉本 綾
鈴木 照子
笠井 清佑

塩路 隆子選

茶筌師の影映りけり春障子
 筍の大地割る音聞きもらす
 軒を借る八坂飴屋に雪言ひつ
 早春や鏽うすうすと鍬の先
 晚酌の盃に臘梅遊ばせて
 生八つ橋販ぐ門前春の雪
 するめ焼くストーブ列車国訛
 柚子坊主ひとが通れば葉に化けよ
 八十路なほ「こつ」が物言ふ鏡割
 多弁なる農夫に貰ふ春野菜
 鬼は外柵持つ妻の威勢よき
 朝靄に朱塗の橋や百合鷗
 京雑煮世の中丸く具も丸く
 臘梅のひかり零るる菓子処
 煎餅を割ればおみくじ春近き
 春兆すむく犬に似し雪浮かび
 春一番ドーナツの穴通りけり
 老梅の瘤隆々と花一輪
 粥一椀風邪恢復の兆し見え
 大寒の月に寄り添ひ金の星

小林 成子
 岡佳代子
 小澤 菜美
 落合 晃
 安本 恵子
 山口キミコ
 栗倉 昌子
 伊藤 憲子
 北尾 章郎
 前川ユキ子
 西田 史郎
 難波 篤直
 桂 敦子
 片岡久美子
 長濱 順子
 石川かおり
 吉田 希望
 秦 和子
 藤本 秀機
 北條 清子

楯焚きて漸く無聊ほぐれけり
里山の水音まろし露の臺
里山に夕日落ちゆく枯野かな
冬幽き棚に百種の茶筥たち
夜回りの影連れ立てり月の町
雪しぐれ比叡より幕引くやうに
初夢の母はほほ紅さしてをり
鳥影の自由自在に初御空
冬うらら肩上げ深く舞妓はん
春を待つ養生の身と看取る身と
地球儀を廻して春よ早く来い
戎の扉叩きあやかる残り福
セーターは運勢欄の色選び
また一つ町家消えたり京の春
初場所の天覧相撲正座して
残り雪見つつ繰り出す耕転機
豆炊きを丹念に味噌寒造り
赫々の炭火を煽ぎ焼豆腐
見上げれば比良の白銀若菜摘
脳活性の暗算すらすら年の豆

新実 貞子
高谷 栄一
田中 浅子
田中 芳夫
富田ヒナ江
笹井 康夫
佐分利亮子
清水侑久子
鷺見多依子
川崎 利子
紀川 和子
北田 敏子
小西 和子
小林 久子
駒井のぶ
青山 正英
飯田美千子
五十嵐 勉
池田加寿子
伊東 和子

寒行の太鼓近づく町家筋
 寝酒いま極楽気分夜半の床
 なにごとも瑞兆なりし初茜
 介護士の爪切る音やあたたかき
 ひそと咲きはらりと散りぬ姫椿
 しつぽのみ見せて素早し恋の猫
 湯上りの小指でのばす寒の紅
 じんと沁む湯を独り占め雪の宿
 王義之を復習ふ窓辺に春の雪
 橋渡る人声運ぶ春の風
 菜を洗ふ指先赤し寒の水
 大寒の湖おだやかに鳩の群
 ゼロ歳と辛寿とともに豆撒く夜
 さむいあさマラソンしたよぽかぽかだ
 ゆきがふるいっぱいっつもってうごけない
 バレンタインケーキつくってつかれたな
 そろぼんのとびきゅうしけんうかつたよ
 生き物は冬をおそれかくれんぼ
 逆もどりつぽみの上に雪の花

伊庭 玲子
 字治 重郎
 大島みよし
 大谷 信子
 和田 郁子
 和田森早苗
 山本 信子
 横田 矩子
 松田とよ子
 松田 洋子
 田所 昌代
 木戸 宏子
 三原 利枝
 森下ちさと
 廣瀬まさや
 土井ほのか
 塩路 彩奈
 廣瀬 結麻
 高野 綸

琥珀集

ロス・タイム

阪本 哲弘

しろがねの身を振ぢらせて滝凍る

雪女転落したり後無音

ロス・タイムこそが人生冬帽子

通院や四温逃さず出かけたる

履き心地よきスニーカー日脚伸び

老境のこれが王道大根引く

どつと来る句集の返書冬ぬくし

冴返る

森下 康子

ハートチョコ亡夫へバレンタインの日

寒明けて五分の魂動きだす

省略の新語氾濫冴返る

幼の撒く豆にパワーの漲ぎりて

立春の花舗に日ごとの入荷ピラ

犬はシャンプーすませて春の髪かざり

株価など無関心なり二月尽

隠岐の娶唄

田下 宮子

船で着く花嫁道具風光る

久々に島の婚儀や春立つ日

春雪に高張うるむ娶唄

「高砂」を謡ふ村長梅香る

春の婚飾塩打つ祝ひ鯛

俎板の海鼠へ刃先ためらひぬ

金モール肩に礼服建国日 (森鷗外)

寒林

能勢 栄子

太陽の恵みに謝して布団干す
寒林へ真白き雲の走りけり
曾てほど雪は降らぬよ雑木山
嬰抱けば満面の笑み春隣
雪の中杣の曳きずる丸太かな
コート脱ぎ座敷に正座客となる
気紛れな村の時雨の幾そたび

ぼっぱ焼き

坂根 宏子

新春の須磨アルプスや空青く
日脚伸び鉄人の街復興す (神戸市長田区)
佐渡抱く大海原や冬の濤
初詣晴着の見えぬ風の街
初詣出店に多しぼっぱ焼き
雪しぐれへぎそば囲む老舗かな
朱鷺来しと噂広がる雪の街

寒日和

竹内 悦子

観音力得たる気分や寒日和 (長弓寺)
茶筌師の黙の緊迫寒ぬくし
人気なき茶筌の里や梅三分
酒好きを招きたる宴蕪鮓
降圧剤飲む齢なり寒の水
文才をさらに欲しかり久女の忌
探梅行なにかあさうな昼の闇

雪女郎

中川すみ子

雪余尺大湖を抱き隠れ里 (菅浦)
業平のなごりの邑や雪女郎
久方に嫁入り話日脚伸び
ふるさとの野川にいまも猫柳
米どころ田圃に群るる寒鴉
求愛のダンスを披露小白鳥
命綱巻きて独りの雪おろし

寒の水

増田 一代

ポトルへと汲む寒の水酒どころ
ガチャ万のむかし問屋や春一番
麦踏みはいまやまぼろし分譲地
夕空の星のまたたき山眠り
編み上げし吾がセーターの好み色
短日や家路を急ぐ街灯り
節分会両手に受ける豆の数

春炬燵

松岡 和子

春炬燵互ひ領分侵さざる
指穴の点々とあり春障子
凍てし菜を摘み来て朝のおみおつけ
いつまでも死なむ指切りあたたかし
寒椿山の学校女兒ひとり
野仏は女人なりけり冬董
樹々の声しかと聴き分け寒肥やし

冬夕焼

三川美代子

己が街の影絵となりぬ冬夕焼
蒼天の凧に託せし夢大き
釣人の去りし栈橋寒鴉
通過せし駅の街灯雪しまき
帰路急ぐ背に煌々と寒の月
木枯に目覚めし時刻午前二時
友の通夜一際輝りて寒昂

藪入

宮崎左智子

藪入りの熟睡見つめる古時計
巫女となる幼き記憶初神楽
初午の賑はひひと日笛太鼓
立春の庭箒目の浮き沈み
酢茎樽干されし賀茂の豊かなる
地吹雪が獣の命攫ひけり
寮生の故郷のみやげ餡の餅

弥次郎兵衛

宮田

香

野焼

塩路

五郎

をんなの座示す膝掛け茶筌の居

病室はどこも「冬ソナ」マスクして

春を待つ雑貨屋に吊る弥次郎兵衛

撞かれるを待つ里の鐘日脚伸ぶ

笑ひ声杜に響けり節分会

炭をつぐ父の気配や朝まだき

風吹きて寄る辺なき身の薄氷

生駒山中

坂上

香菜

囀り

杉本

綾

勧請繩かかる谷川椿落つ

丸彫の仏三体梅匂ふ (石仏寺)

こまやかな格天井や春の翳

黒米の飯はむらさき土筆和

一列に登る墳丘初音かな

手入れ良き行基の墓や白椿 (竹林寺)

春風や行基世のまま摩崖仏 (金勝寺)

春一番言葉忘じし鸚鵡かな

無位無冠篤と馴染みし冬帽子

露の臺日はさんさんと水車小屋

当ても無き旅を待ちをり冬帽子

味噌汁の香に目覚めたり春浅き

喜寿傘寿無事に過ぎけり下萌ゆる

野焼見て戦国の世を思ひけり

日溜りの辛夷の蕾ふみけり

葷咲くコンクリートの割れ目にも

囀りに元気を貰ふ厨窓

出来上りよき粉ふきて古老柿

しゃかしゃかと枯葉掃き寄せひと日終ふ

リフォームの鑿音高し春隣

長老のとんど焚く火に顔火照る

四月号月評

塩路 隆子

月評を書くにあたって、今月はさてどんな句が出てくるかが楽しみなものである。書き始めるとどんどんその句にはまり込み、わくわくしながら月評をしている自分に驚くことがある。月評を書くことが、筆者にとつても楽しみなひとときとしている。さて今月も先月に引き続き最初の二句以外は瑠璃集からの句を取り上げさせていただく。

春雪に高張うるむ娶唄

田下 宮子

ご主人の出身地である隠岐島での結婚式に参列されたときの一連七句の中の一句である。どの句をとつても風土色の濃い素晴らしい作品である。高張とは高張提灯のこと、長い竿の先につけて高く掲げ遠い処からでも目に付く提灯である。娶唄が出る頃は宴もたけなわ、夜の霧か靄に提灯の灯もうるむころである。いや参列者の感動の心かもしれない。

「長持唄」や「高砂」も含めての娶り唄であろうが鄙びた地方での結婚式の様子がうまく表現されている。「うるむ」の措辞が一段と情緒を深くしている。

老境のこれが王道大根引く 阪本 哲弘

作者が今般上梓された「山ざくら」は瓊での句集第一号である。一句も遊びのない格調のある立派な句集である。会員の中にも「今まで自分の作っていた句は一体何だったんだろうかと思う位の衝撃を受けた」との感想を述べられた方もいるほどである。この句も然り。「大根引く」ことにより老いてからの自分の生き方を、王道と捉えられた崇高なまでの作者の心境に感動。また「これが王道」と強調された技巧に脱帽。大切にして頂きたい作品の一つである。

するめ焼くストーブ列車国訛

粟倉 昌子

東北地方主に青森県へ旅をされたときの作品である。筆者は話やテレビではストーブ列車を知っているが、体験したことはない。ローカルならではの味わい、一度は乗ってみたいものである。句全体から流れる人情、そこに乗合わす当地人達の暮らしまでも、想像出来て楽しい。暖かき、そこに流れるするめを焼く香りを醸し出している。一連の五句ともに優れた作品に仕上がっている。樟蹊子にも良く似た句のあったことを懐かしく思い出した。